

# 95年3月、神戸・西宮にて

阪神淡路大震災後の現地から<その1>



## 明石海峡を望む地へ

3月12日、日曜日早朝、JR舞子(まいこ)駅前から見る明石海峡は、鮮やかに晴れ上がっていた。開けた視野の左手から中央向こう側に、数年後に完成する明石海峡大橋の橋梁を結ぶロープが伸び、穏やかな早春の青海がその下に横たわっていた。それは、ここが大地震の震源であることを忘れさせるほど、のどかな光景だった。今年(1995年)1月17日午前5時46分、数千年の時を経てこの海底に蓄積された地震のストレスは、一気にそのタガを外され、ここから東方へちょうど六甲山系に沿うような形で、大きく大地を切り裂いた。人口が密集した神戸・芦屋・西宮といった都会を襲ったため稀にみる大災害になったのは、周知のとおりである。反対方向に向かったエネルギーは、淡路島北西部の街々を襲った。こうして地震は「阪神淡路大震災」と名付けられた。

さて、ここに来たのには訳があった。あの地震が起きた時、これはただならぬことが起こったと誰しも思っただろう。そしてこの大震災に遭遇した人々に、できることなら手助けをしたいと思った人もいただろう。だから首都圏でも「義援金」を送った人が多かったし、それを募る団体に協力した人も多くいた。さらに時間が取れる人の中には、震災後の現地へ赴いて救援物資の配送に当た

ったり、その他もろもろの仕事を引き受けたボランティアも少なからずいた。私の場合はお金だけでなくできれば現地でお手伝いもしたいと思った方だが、それを仕事を休んでも行こうとは思わなかった。第一、幼い子供のいる家庭をかかえてもいた。そこでこう考えた。今現地で働いている人も、時間がたつと疲労困憊して帰る時が来るだろう。それなら、その時時間をやり繰りして出かけようと……。幸い3月も10日を過ぎると、学校では卒業式も終わり、授業のない時期がやって来る。ここで短期間で良いから何かしらお手伝いに行こうと決めた。

どこに行くかは、震災直後より妻の通う教会の関係者が何人か、神戸市垂水(たるみ)区本多聞にある「一麦(いちばく)教会」に赴いていた。一つの手がかりはこの教会だった。しかし、事前にここに詰める関係者と連絡を取ると、3月にも入ると手伝いの内容は被災した教会の建物の修復とか修理が中心で、仕事には専門技術が必要だったり危険を伴うことしか残っていないと言う。正直言って自分ができるかどうか自信がなかった。そういう迷いをもった頃、神戸行きの直前だったが、自分の勤める学校の教職員組合の関係で、被災地区の公立校を避難所とする人々を支援するという話が入って来た。一つは神戸市長田区にある県立長田高校のそれで、もう一つが西宮市建石(たていし)町にある市立西宮西高校の話だった。出発直前、長田高校での入試期間中の手伝いの話は、水道の開通でその必要がなくなり、丁重なお断りの連絡が来た。という訳で、まず「一麦教会」に足を運びそこで話を聞いた上で、やはり難しいなら西宮入りしようと、選択に幅を持たせて神戸を目指すことになった。

ところで、神戸にどうやって来たかという、以前から立川駅の北口に神戸市の三宮(さんのみや)を通過して垂水区のこの舞子まで行く長距離バスが運行されているのを知っていた。大震災が起

きてすぐに不通になったが、一か月後の 2 月 17 日、被害程度の激しい三宮を避けて、垂水経由舞子行きが再開されていた（3 月 17 日以降完全復旧）。鉄道では神戸市の中心部で一々代替バスに乗り換えねばならず、相当な時間を覚悟していたが、この中国自動車道経由のルート再開のおかげで夜行バスとはいえ、何の労苦も受けずに目的地の手前まで来ることができた。朝日を浴びた舞子の街は、所々に青いビニールシートをかけた住宅が見られる程度で、被災地といった面影はほとんどなかった。

## 神戸を西から東に横断する

「一麦教会」までは駅前から路線バスに乗った。神戸市西郊に広がる丘陵地の住宅街の一画に、その鉄筋コンクリート三階建ての建物はあった。地震が発生して一週間後、他の宗教団体・NGO(非政府市民組織)などと時を同じくして、神戸市西部地区のプロテスタント教会の連絡組織「神戸宣教協力会」が救援に動き出した。全国の教会関係を通じて救援物資が続々と神戸に入って来るが、その受け皿がない。比較的被害の少なかった(建物が壊れなかった)「一麦教会」がその救援対策本部に指定されたのである。2 月末までに扱った救援物資は計 100 t、義援金は 1000 万円を越え、駆け付けたボランティアもこの時点までで述べ 4000 人以上になったという。時には行政の救援物資集積所にも出かけて配布を手伝ったが、横取りするのではと疑われた時も、「キリストさんとお天理さん(天理教のこと)は大丈夫」と、炊き出しなどでの献身的な活動を知る役人の対応で、信用を得て行ったという。牧師の子安敏夫さんからは、その他様々な当時とこれまでの話を伺った。ボランティアの担当者からは、教会での仕事は日曜はお休み。明日からの仕事も屋根瓦の葺き替えで、素人のあなたには勧められないと返事があった。そう聞いて、ここには東京から託された義援金だけを置いて、退くことに決めた。正午を回っていた。再び舞子駅に戻り、JR 線に乗って震災の中心

とも言うべき神戸の中央に向かった。目的地は西宮だったから、これから被災地を西から東に横断することになる。須磨浦公園辺りまで車窓の眺めに異常はなかったが、その先、神戸の市街地が北側に大きく開け始めると、沿線にも倒壊家屋とその片付けられた跡が目立ち始めた。そして鷹取駅を過ぎると、列車が幾分減速しかたと思うと車内放送が入り、「窓を開けて乗り出したりしないでください」と乗客に伝えた。それから北側の車窓に展開したのは、何とも異様な光景だった。一面焼け野原となった地区が広がり、一部には地震の激しい揺れで倒れたまま焼かれたらしいコンクリートの建物も見える。テレビを通して見知っていたものの、実際今私が見る光景ははるかに激しい戦慄を覚えるものだった。列車は、一部修復中の新長田駅に入った。一応カメラをかまえて来たが、とても興味本位にカメラを向けられるものではなかった。列車が走り出すと、再び戦場跡のような光景が続く。それを食い入るように見つめた。空は朝とうって変わり、今にも雨が降り出しそうな曇り空。その隙間から漏れた陽光が、被災を免れた高層アパート照らす。そこには人の潤いが感じられ、道路一本隔てた「死の街」と鮮烈なコントラストを描き出していた。



震災当時の東灘区の一画

阪神岩屋駅に近接する JR 灘駅で降り、倒壊したビルがそのままの市街地をしばらく歩いて、代替バスに乗り換え、阪神御影駅へと向かった。降り出した雨に曇ったガラス窓からは、街の様子は分からなかった。御影駅でようやく阪神電車に取

りついた。しかしこの先にも、激震に見舞われた地域が広がっていた。死者が最も多かった東灘区。その青木・魚崎界限では、潰れてしまった木造家屋とそれが片付けられた跡だろう空にぽっかり空いた土地を多く、車窓から見る事ができた。所々、小規模な火災跡も。この下で亡くなった人を思うと、胸に熱いものがこみ上げて来た。目指す西宮西高校の最寄り駅、阪神香栢園(こうろえん)駅に降り立ったのは、午後も2時を過ぎていた。

## 阪神香栢園駅周辺

実は、この香栢園には思い出がある。それは二十年以上前、この駅のすぐ北側のマンションに伯母夫婦の住まいがあり、数回ここを訪ねたことがあったのだ。その後、伯母がなくなり伯父もこの地を離れて灘に移り住んだので、訪ねることもなくなっていた。六甲から流れ下る夙川(しゅくがわ)沿いに立つそのマンションは、幸い倒壊を免れて建っていた。しかし近づくると、玄関には倒壊の恐れありとされた張り紙がされており、外見とは違うことが分かった。さらに、ごそごそと中から出てくる人がいる。声をかけてみると、近くに避難していたこの昔からの住人で、伯母とも付き合いのあった人だと言う。「建物がこんなになってしまっ大変ですね」と言うと、その人は「最近の調査でこの建物は修復可とされたのに、大家の酒造会社が建て替える意向で、早晚ここを追い出されてしまう」とこぼしていた。

マンションのすぐ南、香栢園駅前には、木造二階建てで一階が半分潰れ倒壊したアパートが、打ち捨てられるようにそのままになっていた。阪神の線路をくぐって南に回ると、阪神高速道路の橋げたが落ちて、復旧工事中的の場所を通る。そろそろ学校のある建石町だなど大通りから一步入ると、角の木造二階建てのクリーニング店が潰れて、道を半分ふさいでいる光景に出くわした。震災後二ヵ月を経てもなお片付けが終わらぬことに、改めてこの震災の甚大さを思いやった。

市立西宮西高校は定時制 16 学級のみ的高校で、



前身の小学校から数えて今年で 70 周年を迎えるという。校舎の大半が当時からのものだそうだ。その高校の門をくぐり日曜なので守衛室に寄ると、避難所の本部は中庭の食堂棟だという。伝統あるごっつい校舎の廊下を歩いてそちらに回ると、公立校の定時制ならどこにもありそうな、百人位は収容できる平屋の食堂が建っていた。入るとボランティアのT氏とOさん、それにここを管理する周辺五町の町内会の代表が一人、当座の仕事もなくのんびりと過ごしていた。ここは文字通り被災者の食堂と救援物資の配給所として使われており、さらに奥にある体育館が被災者約 70 名(毎日変動する!)の生活の場となっていた。私の仕事は、この救援物資の管理が主だった。前任のT氏からそれを教えてもらい、早速「店番」に着いた。来る前、ガスも水道も出ないと言われていたが、3月初めにそれが復旧。少なくとも水には(従ってトイレにも)困らなかった。比較的豊富と思われた救援物資には、ありとあらゆる物があった。食品では紙パックのジュース、ウーロン茶、インスタント・ラーメン、レトルト食品、味噌・醤油など。衣料・雑貨では中古の古着、新品の下着、物干し挟み、爪切り、生理用品、紙おむつなど、まだまだ豊富な在庫があった。中でもフランス製の飲水のボトルが二種類以上もあり、「飽食日本」に突然襲った災害を象徴しているかのようだった。

夕方になると食堂テーブルの一隅に置かれたカセットコンロに火をつけ、昔懐かしい湯たんぽを暖めにかかった。被災者のいる体育館はもちろん暖房がなく(ストーブは禁止された)、未だ寒いこの季節、毛布やふとんにこれにくるめて暖を採

るしか術がない。夕飯時になり配給の弁当を食べに出てくる人たちは、これを帰りがけに持って行く。それにしても、毎日夕飯が冷や飯の仕出し弁当ではつらい。町内会の後援がうまく行っているこの避難所では、例外的に毎日、会員が当番で市から借りた大型プロパンのコンロで汁物を一品、提供していた。午後9時過ぎまで、三々五々、被災者がやって来ては食べて帰って行った。

もう一つ例外と言えば、電話の取次ぎで走った体育館には中古品とはいえ、畳が敷いてあった。これも当初の避難所の運営者である学校長の機転で、自衛隊の労力を使って運び込んだのだという。おかげで眠る時の寒さからは解放されたようだ。掃除を済ませ在庫の出入りをチェックした後の夜10時、「店じまい」とした。明朝7時には再開となる。寝る部屋として提供された校舎二階の「作法室」で、持参したシュラフ(寝袋)と毛布で寝入ることになった。

## 西宮市近辺の被災状況

明けて3月14日の月曜日。洗面台に立つと、北西を向く窓から雨雲にけぶる六甲山が望まれた。遅れぬように食堂に駆け付ける。朝と昼のために、一人当たり6本のコッペパンの配給がある。しかし保健衛生上、そのまま出すわけには行かない。用意されたビニール袋に入れ、バターやジャムの小さな包みとともに提供した。弁当以上にこちらの評判は良くない。捨てるのはもったいないと、避難者の有志が住むのに危険な自宅に帰ってしまった仲間の所を回り配っていた。

朝飯での人の出入りがなくなった頃、食堂の向かい側に設けられた本部の電話で、町内会長の当番が避難者の数を確認して市に報告していた。この日は68名で、前日比数名の減だった。避難所は、震災の当日すぐに周辺の被災者から「使わしてくれ」と要望があり、この事態に学校側が門を開け収容したのだと言う。最初の1週間は学校側の運営だったが、在校生徒の消息の把握など他にも仕事を抱えていた事情もあり、周辺5町の自治



橋げたが落ちた阪神高速 西宮市本町付近

会の自主管理に移行させた経過がある。ただし、次々と集まる救援物資を管理するのに、被災者とは別の立場の人が必要と考えたようだ。そこで、ゼンセン(全繊)同盟・大阪教組といった労働組合のボランティアが詰めかけることになった。最終的には教職員組合が対応して当たることになり、この時期は関東地方の高校教組が入っていた。

午前中は二食分のパンの受け入れと、兵庫教組会館に置かれた救援対策本部への定時連絡位しか仕事がないので、暇を持て余した。午後はプロパンの伝票を市役所に送り届けるため自転車を借りて(東京の調布市商工会議所提供のもの)、阪神西宮駅界隈まで出かけた。この街の興りでもある西宮えびす神社の前を通ると、大きな石灯籠がずれていたり倒れていたり、重要文化財の土塀が崩れていたり惨い傷をさらしていた。駅前の柳通り商店街入り口には、見慣れぬカーキ色のただ旭川と書かれたショベル・カーが瓦礫の山に立ち向かっていた。辺りにはこれもカーキ色の制服を

着た人たちが働いていた。自衛隊だった。その異様な光景は、ここが災害の只中であることを改めて思い出させた。駅の北側に回り込み、市民病院の敷地を抜けて市役所に入る。被災地の自治体では、教育委員会が避難所を担当していた。その委員会は、隣の分室にあるとのこと。建物に入っても要領を得ず、二三次回ってようやく総務課にたどり着き、用を済ませた。

## 震災当時、学校では . . .

夕方から夜にかけては、昨日と同じ仕事だった。ボランティアの方は、埼玉県から来たK氏がT氏と交代した。夜、校舎に明かりが灯り、しばらく会議が行われていた。こちらの仕事が終わったらお呼びがかかって、教員の震災以来久しぶりの飲み会に招かれた。

学校の人的損害も大きかった。教員は全員無事だったが、事務長は二次災害として起きた市北部、仁川百合野(にかわゆりの)町の土砂崩れで帰らぬ人となった。東奔西走した校長は妻が重症で病院との往復を強いられていた。怪我こそなかったものの、教員のH先生は自宅が住めない状態になり、最も近いこの学校の避難所で暮らしていた。宴会



**34名の犠牲者を出した宝塚市と隣り合う仁川百合野町の崩落現場は今、芝桜公園になっている**

を催していたのは分会長(組合の長)だったが、教頭もその席におり、二人でその時を回想していた。地震直後、神戸市西部の丘陵地の自宅にいた教頭

は、家族を置いて通勤の車を出し学校に駆け付けようとした。途中早くも交通規制にかかり前進を阻まれたが、機転を利かして六甲山の山中を迂回して何とかたどり着いた。自宅が近かった分会長は間に合わなかったが、とにかく三日目には出校した。学校は「避難所」となり戦場と化していたが、ここでは教員がイニシアティブを取るしかなかった。行政も混乱し、周辺被災民を考慮に入れず避難者の実数しか配給食を届けなかった。その時は、どやし付けてでも、不足分を持って来させたと言う。

西宮では千人が犠牲となった。この学校の近辺は北の六甲山寄りよりはひどくなかったが、香榊園西側の弓場(ゆば)町や屋敷町は建っている住宅の方が少ないくらいで、焼け跡のような所ようやく再開した銭湯がぽつんと立っている。またその六甲山寄りの丘陵地の入り口に立つ市立西宮高校は校舎が折れ、完全に使いものにならなくなっている。JR西宮駅北側の中殿町・中須佐町一帯は、コンクリート住宅への改良が進んだ所を残して、他は壊滅したという。そんな話を聞くうちに、今度の震災は早朝に起こり被災者の大部分が自宅で被害にあったことから、同和とか在日とか独居老人とかの社会的弱者に被害が集中した可能性がある、と思い至った。

とにかく最初の一週間を持ちこたえることが、学校側に課せられた使命だったという。時がたてば社会や行政のバックアップが整う。それまで生徒の安否の確認をとった本務の他に、避難所の運営を行わなければならない。これは大変な事で、西高の場合、後者の仕事を1月末までに先の町内会の自主管理に移行させたという。そうでなければ、我々の方が参ってしまったらと、話していた。実際、この事態を避けて通れなかった被災者の代表さらに副代表が相次いで入院。代替りの仕事をその婦人たちが行っていることからして、それは十分理解できることだった。

**この項、続く。**